

# 日本国際情報学会通心

## 日本国際情報学会通心

CHINA

— 中国情勢特集 —

### 目次

- |  |       |
|--|-------|
| ▶ 軸足の置き場                                     | 諏訪 一幸 |
| ▶ 上海と日本人                                     | 高綱 博文 |
| ▶ 中国社会を動かしているのは1960年代の世代<br>— 現在50歳前後 — の共通項 | 長井 壽満 |
| ▶ 少林寺よ、おまえもか！！                               | 増子 保志 |
| ▶ 歴史的人物の評価                                   | 山本 勝久 |
| ▶ 百聞は一見にしかずか？                                | 山本 忠士 |
| ▶ 事務局からのお知らせ                                 |       |
| ▶ 編集後記                                       |       |



## 軸足の置き場

静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科  
教授 諏訪 一幸

2つの大学で政治問題を中心に現代中国に関する講義を行っているが、前期授業もどうにか終わり、ほっと一息ついた。

それから一週間ほど後、この半年間の出来事をつらつら振り返っていると、2つの大学の学生から受けた質問の中に、一つの共通事例があったことを思い出した。「先生は中国共産党が嫌いなのですか?」、「台湾に関する話を聞いていると、先生は国民党嫌いのようにも思えるのですが」。問われたときは、正直戸惑った。と言うのも、私は好き嫌いで中国を語ることを極力避けてきたつもりでいたからだ。

そこで自問した。私は講義で、中国を論じる際の判断基準を学生に示すことができたのだろうか。自らの軸足の置き場は一体どこにあるのだろうか、と。

地域研究者に求められているのは、グローバル化の進展を与件に（この問題をめぐる賛否の議論は暫し棚上げし）、研究対象国・地域のありのままの姿を描き出すことによって、わが国の国益を確保し、国際場裏で更なる貢献を行うための道程を示すということに他ならない。そのため、私は中国の、「私が認識するところの真実」を学生に伝え、彼らの間に対中理解の基礎を築くことに最大の力点を置いてきた。それは時として批判的なものとなった。こうしたスタンス、つまり軸足の置き方が、学生の目には「共産党嫌い」や「国民党嫌い」として映ったのであろう。

中国の「真実」とは何か。私は彼の国の政治制度の一端を明らかにしようと、共産党が武力で学生らを鎮圧した「6・4」天安門事件について述べた。事件を扱ったドキュメンタリー映画を上映し、事件の最中に私が現場で撮影した写真を見せたりもした。学生の多くがショックを受けたようだった。強固な一党体制を構築し、それを是が非でも守り抜くことを選んだ共産党の存在抜きに中国は語れない。さらに、歴史を知り、そこから教訓を汲みとることの重要性を指摘した。国民党が台湾に入った直後に起こった「2・28事件」は、映画「悲情城市」でも描かれた、「省籍矛盾」の原点である。「政治的自由」を謳歌する現在の台湾からは想像がつかない出来事だとの声が学生からあがった。事件から60年以上経った今でも台湾の人々の心の奥底に残る「2・28」の傷跡が、対中関係改善を進める馬英九政権の足かせになっている。

確固たる軸足の設定は、自らの立場を明らかにし、強化する。

7月末、わが国の中国駐在大使としては初めて、民間から登用された丹羽宇一郎大使（元伊藤忠社長）が北京に着任した。経済的つながりをますます強める日中両国である。官僚出身者にはないしなやかな発想で、関係強化に全力を尽くして欲しいところだ。ところが、氏は赴任直前、「（中国の軍事力拡大は）大国としては当然といえば当然のことかも知れない」と述べ、着任当日には「愛国・親中の精神で頑張る」と意気込みを表明したという。いずれも理解に苦しむ発言である。なぜなら、20年にわたる中国の軍事力拡大政策は軍縮を進める現下の国際情勢に背反するものであり、しかも、軍事的透明性の低い隣国の存在は何と言っても不安の種だからだ。また、「愛国」にせよ「親中」にせよ、近年の日中関係は、この言葉自体が少なからぬトラブルのもとになってきたことを明らかにしている。大使の発言は誤ったメッセージとなりかねないのである。したたかな外交を展開する中国に足元をすくわれるおそれもある。

新大使には、まずは上記の発言にうかがわれる評論家的スタンスを軌道修正のうえ、自らの軸足の置き場或いは立ち位置を常に斟酌しつつ、職務を全うされることを切に願う。

## 上海と日本人

日本大学大学院総合社会情報研究科  
教授 高綱博文

現在、万博で賑わっている上海は、世界の都市のなかで在留日本人が多いことで知られている。2007年10月、長年トップであったニューヨークを抜いた。そのほとんどが上海に進出した日本企業の社員とその家族であり、観光客・出張者などの短期滞在者を含めると7万人以上いるものと思われる。

上海の日本人学校も2校あり、小中学生約2,600人が学んでいる。上海には和食店がいたるところにあり、日本の受験に備えた大手予備校まで進出し、日本語の無料情報誌が10誌以上発行されている。

上海の在留日本人が多くなったのは、上海が中国最大の商工業都市であり、港灣、空港、道路や鉄道などのインフラが整備されていることが中国に進出する日本企業を引き寄せているからである。特に2001年に中国がWHO（世界貿易機関）に加盟して以降の上海の日本企業は急増し、現在は約6,000社を数える。

上海は日本にとって昔からなじみのある都市であり、戦前は40数カ国の外国人の住む「国際都市」して有名であり、日本人の往来が盛んであり、ピークの1943年には約10万人の日本人が住んでいた。幕末以来、日本知識人にとっても上海は長崎から二昼夜の航海で西洋文明を垣間見ることのできる「窓」として役割をはたしてきた。さらに1923年に長崎—上海定期航路（日華連絡船）が開設され、長崎丸・上海丸が就航するようになると、上海は日本人にとってパスポートのいらぬ最も身近な外国となった。

1945年8月に日本が敗戦すると、約8万人の日本人居留民は上海を接收した中国国民政府の管轄下に置かれ「日僑」と呼ばれた。敗戦後、一部の留用者を除くと上海の日本人は強制的に帰国させられ、その後、1970年代まで中国政府は日本人の上海訪問を容易に許可しなかった。しかし、日中国交回復と中国の改革・開放政策により1980年代に日本人は上海に再び足を踏み入れた。日本企業の上海進出が本格化するのとは前述した通り今世紀に入ってからであり、それ以前は日本人の長期滞在者は1万人に達しなかった。

一方、1980～90年代には、上海から大勢の中国の若者が留学や出稼ぎのために日本に渡り、彼らは日本で日本語だけでなく日本的経営やサービスなどを学んだ。その後、上海に帰った彼らは日本企業に勤めたり、日本人相手のサービス業に従事しており、彼らの存在が日本企業の上海進出を後押ししている。

ある人によれば「世界で一番上海を語りたがる」のは日本人であるそうだが、今も昔も上海な日本人にとって魅力のある特別な街であり続けている。



## 中国社会を動かしているのは1960年代の世代 —現在50歳前後—の共通項

長井 壽満

中国関係の仕事をしていると、よく中国はどうなっているの？という質問をもらう。そして何時も返事に困ってしまう。どんな返事しても「群盲象をなでる」になってしまうのだ。大きな国土、多くの民族、多様な自然の坩堝のなかで共通項を探すのは難しい。最近世代という共通項があるのに気が付いた。今付き合っってバリバリ仕事している連中は50歳前後。1960年代生まれなのだ。

その世代は飢餓、文革を直接経験していない。そして最初の戦争・革命を知らない世代なのだ。日本の団塊の世代に似ている。日本の団塊の世代は戦争を知らない。でも終戦直後の貧しさ、傷痕軍人、核戦争キューバ危機、受験勉強、学生運動を経てきた。中国の50歳代の特徴を下記に挙げてみた。

- ①1960年代の始まりは、中国社会主義建設の第二次五年計画(大躍進計画)の後半にあたるが、それは同時に凄惨な「大飢餓1959-1961年」の後期にもあたっていた。実際の「飢餓体験」の有無に関わらず、60年代生を受けた彼らは、大躍進成功の公式宣伝の影に想像を絶する飢餓が存在した事を潜在的な記憶として心に深く刻んだ。
- ②この世代がうけた小中学校の教育は、1966年に始まる「文化大革命」の時期にあたる。年齢的にこの狂乱の運動の先頭になって「革命」する立場になかったのだが、革命の名のもとに行われた数々の非人間的な暴虐を実際経験し、見聞きした。これはこの世代のトラウマであり、原体験記憶である。
- ③文革終結は、この世代の青春期のことだった。希望と不安の入り混じる緊張の数年間を、彼らはもっとも多感な時代に送っている。特に、1978年の北京の民主化運動(「北京の春」壁新聞)は彼らの人生観に深い影響を与える出来事だった。「革命」の偽善性の認識、中国社会に対する根深い不信、与えられた「輝かしい歴史」に対する拒絶、こうした意識の中で、彼らは自分の生きる道を探った。(参考：1977年鄧小平復活、1976年毛沢東死去)
- ④1989年の「天安門事件」—中国民主化運動—は、彼らの青春後期にあたる。この世代はこの時期すでに学生ではなかったが、実際に運動に参加したり、あるいは二十代後半の若い大人として、運動のなり行きを深い同情をもって見つめていたりしていた。
- ⑤1990年代には、経済自由化の波に乗り、独立して経済活動する者が多出した。現在成功者の事業の出発点は1990年代に種が蒔かれた、時流に乗った多くの人は豊になった。
- ⑥この世代にとって一番肝腎だと思われるのは、彼らが全員「抗日戦争」など実際の中国革命の経験をしてないことだ。もちろん、1950年代に繰り返された政治運動の熱狂も体験していない。彼らの誕生は「共和国」成立から十年以上も経った時期であり、中国をめぐる戦略的な位置はすべて決定済みの状況となっていた。彼らは潜在的帰国も含めて、いわゆる「革命」をまったく知らない最初の世代と言えよう。
- ⑦そろそろ、老年期・引退時期が見えてきた歳(50歳代)であり、70～80歳代の両親がおり、20歳台の一人っ子が居る。そして一人っ子は豊かな時代に育ち、就職難である。一人っ子は親との共通体験が薄い。
- ⑧世界的大資本・市場の動きが人々の欲望を画一化しており、その結果東京、パリ、北京も同じ欲望の支配する都市と化し、文化全体が市場の商品化の対象となった。そして農村人口の衰退。

以上のような歴史的条件がこの世代にもたらしたものは、端的に言って、組織不信と強い個性(創業者的意識)という二点に絞られよう。1990年代朱 鎔基首相の国営企業改革の時に多くの共産党幹部が民間に流出した。共産党に入らない知識人もおかった。この世代の深層心理をさらに知りたい方には、虹影『飢餓の娘』集英社、2004年をお勧めする。Jung Chang『ワイルド・スワン』講談社、2007年は知識人の立場から描いている。

虹影は100万人住んでいたという重慶のスラム街に育ち、中国最下層の人々から見た中国を描いている壮絶で逞しい「個人史」小説である。

(関根謙「集団幻想」からの脱却——中国1960年世代の挑戦』に加筆引用)

i) 1978年から1979年にかけて、中国では「北京の春」と呼ばれる民主化運動が巻き起こった。北京市西単地区の一角には共産党や指導者、現行制度を批判する内容を含む大字報が大量に張られ、この場所は「西単民主の壁」と呼ばれた。

[http://news.searchina.net/jp/disp.cgi?y=2006&d=1206&f=column\\_1206\\_001.shtml](http://news.searchina.net/jp/disp.cgi?y=2006&d=1206&f=column_1206_001.shtml)

## 少林寺よ、おまえもか！！

道家服部流高級気功師  
増子保志

昨年の夏、北京を訪れた際、「功夫伝奇」なるカンフーショーを観た。少年の頃から少林寺で修業した主人公の僧侶が、修練を積み、一度は仙女の誘惑に落ちてしまうものの後悔し、最後には師匠の後を継ぎ立派な僧侶となるという成長史を描いたものであった。観る前は、どうせ“つまらない田舎芝居だろう”と高を括っていたが、これがどうして前日に観た京劇と同様とても面白いのである。

「武術で有名な中国河南省の名刹“少林寺”が、市場経済の波にもまれている。地元の登封市政府が観光開発のために先月、香港企業と合併会社を設立。将来は香港市場に上場する計画で、寺側は行き過ぎの商業化に反発しているが、利権をめぐる争いという見方も出ている」と報じられた。(2009/12/17朝日)

中国国内では少林寺の上場計画に対し「イメージ悪化につながる」、「少林寺という宗教財産を商業利用してよいのか」との批判の声があがっているが、登封市政府は「上場するのは少林寺そのものではない」と反論している。

しかし少林寺自体、雲南省での寺院経営やこれとは別に、香港で約五十億円を投資する「香港少林寺」建設を決定するなどしており、そもそも少林寺自身が「少林寺そのものを会社化して上場する気では」と噂されている。

市政府と香港企業によるテーマパーク化に寺が反対しているのは、寺が観光利権にありつきたいからであって、これは単なる利権争いではないのか。両者とも“金になる少林寺”はとても素晴らしいご馳走である。

少林寺は多くの中国武術ファンにとって憧れの地である。各地から入寺希望者が訪れ、武術講習を受ける学費は、年間で三億五千万円(約49億円)にも上る。少林武術の普及につれて、そのブランド価値は上昇するとともに、弟子入り希望者は国内外を含め増加の一途をたどっている。

また、武術関連用品の一大生産地としても発展中でメーカー20社を抱え、年間で八千万円(約11億円)にも達する。さらに、世界各地でのショー公演やネットショップでの関連商品販売などビジネスで大成功を収めている。

少林寺の現住職は、MBAの称号を持つ釋永信師(44)。39歳という史上最年少で住職に就任し、少林寺の知的財産権保護で評価される一方で、秘伝の医術書の販売や境内での水着女性コンテスト開催などで批判を浴び、“少林寺最高経営責任者(CEO)住職”と揶揄されるほどの“ビジネス坊主”である。

最近の中国社会の変化は速い。昔はそう変わらなかった慣習や習俗が急速にその姿を変えている。変化に戸惑い、疑問が生じてくる。少林寺が伝統技能なのか宗教なのかは意見の分かれるところであろうが、柔道や剣道はこのようにはならない、いやできないだろう。いわゆる何でもありの観光ビジネス化、いかにも中国らしくて面白いではないか！



## 歴史的人物の評価

山本勝久

歴史上の人物についてのあれこれを読むのは楽しい。かの荻生徂徠は炒り豆をかじって酒をのみながら英雄豪傑の悪口を読むことを楽しみとしていたとか。

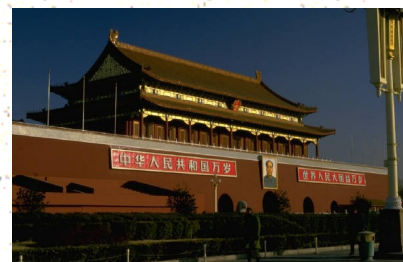
聖徳太子はおもしろい人物である。これは十七条憲法を制定したとか、法隆寺を建立したとかいう意味ではなく、日本人が好む歴史上の人物で、太子がずっとランキングの上位にくいこんでいる事実に興味をひかれるのである。じっさいのところ、戦後の古代史の実証的研究の進展によって、これまで聖徳太子の事績とかがえられてきたほとんどすべてのことがらに疑問符がつけられている。つまり、歴史的功績の評価がずり下がってきているにもかかわらず、いまなお尊敬すべき人物とみとめられているのである。最近亡くなった立松和平氏のような自然・環境保護派からも讃仰された。立松氏の主張は、太子に体现された寛容の精神を21世紀的視点から再評価しようというもので、現代の日本人にも受け入れられやすいとおもわれる。ここには、古い時代から生きつづけた法隆寺の存在も大きな役割をはたしたにちがいない。

7世紀の日本からずっととんで20世紀の中国、毛沢東について。この人の評価は、その没後(少なくとも日本においては)大きくゆれ動いたといつてよからう。毛沢東の評伝はさまざまな観点からいまなお出つづけている。ここでは毛沢東についての評価としてはややくせのある異色の書、高島俊男氏の『中国の大盗賊・完全版』(講談社 2004年)にふれておきたい。高島氏は政治家・毛沢東についてはかなり批判的であるが、文人・毛沢東については手ばなしでほめている。1936年、毛沢東44歳のとき、延安での作に「沁園春・雪」という詞がある。これについて高島氏はつぎのように評している。

「詞」という詩は、一つ一つの詞題(このばあいなら『沁園春』)によってことばの配置の規則・制約が異なるというやっかいな形式なのであるが、この作品はそれをクリアして、殺伐、傲慢になりかねない内容を、優雅で華麗な古典的表現によって制御している。こんな芸当のできる開国皇帝は、古来一人もいなかったのである。

ここでいう「開国皇帝」とは、戦乱に勝ち残って王朝を開いた劉邦や朱元璋に比してのことであり、毛沢東をこれら「開国皇帝」の系譜の上に位置づけつつ、中国の伝統的な文人としての側面をもつものとしてとらえている。

人物の全体像をとらえて、そこに公平な判断を下すことは難しい。時代が近ければ近いだけ、また、遠ければ遠いだけの困難さがつきまとう。聖徳太子であれ、毛沢東であれ、その評価が大きく変化したのは、前者については、敗戦後に皇国史観の締め付けがなくなったことが大きいし、後者については、ソ連の崩壊によりマルクス主義の無謬性が否定されたことが決定的であったといえよう。イデオロギー的拘束がなくなれば、そのぶん自由になるとはいえ、こんどは自己の価値判断の軸をきちんとこしらえなくてはならない。立松氏といい高島氏といい、そののところがきちんと確立されているからこそ、その評価に説得力をもつといえよう。人物評のおもしろさと困難さの理由もこのあたりにあるのではなからうか。



## 日本国際情報学会通心

## 百聞は一見にしかずか？

吉林師範大学東亜研究所教授  
山本忠士

日本の若者のアメリカ留学が、減少の一途をたどっているという。中国でも、日本人留学生は決して多くはない。特に、韓国留学生と比較すると、その差が歴然とする。私の勤務する中国・吉林師範大学でも韓国の留学生は200人を超えるが日本からの留学生は6名に過ぎない。国際化がますます進展する時代にあつて、日本の若者の海外離れはまことに残念である。若い時代の留学経験は、同世代の学生同士の交流、生活経験を通じて等身大の相手国理解を深める絶好の機会となるし、海外経験を持つ若者の育成は一種の安全保障にもなりうるものである。短期間の観光旅行であっても、その経験は、具体的であるだけに「百聞は一見にしかず」の役割を果たす。しかし、短期的な観光旅行では「一見」が「百聞」を超える相互理解の促進剤にはなるとは限らない面もあることを知る必要がある。きちんとした説明・理解がないと相互不信の原因になりかねない危うさもある。

最近も、ある日本の新聞に中国人観光客のトイレ使用のことが載っていた。浅草のホテルでトイレのゴミ箱に使用済みのトイレットペーパーが入っていたという話である。この話を聞いても、何のことか分からない人も多いに違いない。この話の背景には日本と中国のトイレ事情の違いが関係している。つまり、中国の一般的な水洗トイレでは、使用済みのトイレットペーパーはそのまま流さないのがルールである。日本のトイレットペーパーは、短時間で水に溶解するように考えられているが、中国のトイレットペーパーはそうではないものが多いからである。何よりも、水洗トイレの排水管が日本より細いことに原因がある。だから日本と同じようにトイレットペーパーを流したら、水洗トイレが詰まって問題が起きる。日本の留学生で、そうした失敗の経験をした人も多い。私個人の経験でも日本の中国大使館のトイレでも同じような光景が見られた。

新聞報道にある中国の観光客のトイレ使用は、中国の標準的な水洗トイレ使用のマナーからいえば、きわめて当然のことである。さらにいえば、それはトイレを詰まらせない思いやりの行為でもある。日本事情については、観光代理店が説明しているだろうとは思のだが、現実はなかなかそうではないようだ。しかし、そうした中国のトイレ事情を知らない日本人にとっては、使用済みのトイレットペーパーをゴミ箱に入れる行為は許せない、不潔な行為と思うかもしれない。中国人はしょうがない人たちだという誤解の拡大が起こるかもしれない。いずれにせよ、日本と中国のトイレ使用の少しの違いについて理解していないことの証左でもある。確かに日本のトイレは清潔だということは「一見」して分かる。しかし、トイレの使用方法は、「一見」だけではわからない。トイレの蓋が自動的に開くとか、温かい水でお尻を洗うとか、温風でお尻を乾かす等、進化した日本のトイレは中国の地方都市の人たちには想像を超えることであるに違いない。きちんとした説明がないと、何がどうなっているのか戸惑うだろう。交流が頻繁になると、些細なことからも誤解が拡大することもある。ネット社会の特徴である。

日本から中国に行った人なら、中国が料金「前払い」の社会だと感じるかもしれない。例えば、中国で個人旅行をしたことのある人なら経験があるだろうが、ホテルに泊まる場合、ホテル代料金のほかに同額の保証金を求められる。つまり1000円のホテルに泊まる場合、2000元が必要ということである。一泊くらいならいいのだが、連泊するときは馬鹿にならない保証金額になるから油断ならない。チェックアウトする時は、部屋の担当者に部屋の品物などが持ち出されていないことが確認されてから、保証金が戻ってくる。実にしっかりしている。

携帯電話も日本のように1か月後に決済される形式ではなく、全てプリペイドカードに一定額を入金しそれがなくなったら通話も終わりである。固定電話と違う移動性の携帯電話料金を回収する手間や経費も要らない。まことに合理的なシステムである。日本でもそうすれば、料金回収に人を投入することもなし、子供の電話代の多さに親がびっくりすることもなくなるだろう。

ホテル代に限らず、新聞代、インターネットの使用料金も全て前払い制である。不思議なもので、こうした「前払い」社会の生活に慣れると、最初にしっかりやっておけば、後はトラブルが発生することがないのできわめて楽である。

いずれにせよ、交流が頻繁になればなるほど、身近な相互の文化や社会システムの理解が重要だし、それが無用な誤解を防ぐことにもなる。

## 日本国際情報学会通心

### 事務局からのお知らせ

☆+.....+☆

#### 予定

- ◎ 10月2日 「日本近現代研究部会」(仮称) 市ヶ谷
- ◎ 11月27日 総会・研究発表会開催 市ヶ谷
- ◎ 12月 2010年度学会誌論文発行

### 編集後記

☆+.....+☆

残暑お見舞い申し上げます。

メールマガジンの特集は何にしようと考えていました。  
今年の5月に上海万博が始まり、7月より政府が中国人の個人観光ビザ発給条件を大幅に緩和されました。  
今年は両国民が互いに観光旅行で賑わいそうです。

編集、発行担当 坊農豊彦

